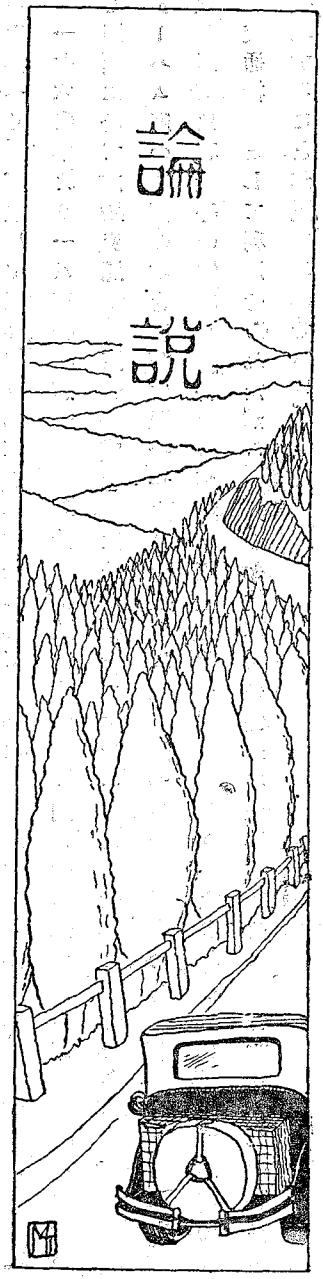

自動車・鐵道協力の必要

長谷川久一

最近の外國電報によれば、アメリカでは鐵道への投資が減少して來たといふ蓋し鐵道は將來貨物輸送の機關としてのみ價値を有するに過ぎず、旅客の輸送は飛行機・飛行船・自動車に取られてしまふであらうといふ豫測から斯く成り來り其の爲め鐵道の株券は一般的低落を告げたとのことである。而して飛行機・飛行船の進出は現在の處ではまだ左程でもなく結局自動車の驚異的發達が、こゝに至

らしめたことは何等の疑をいれざる所であらう。

内陸交通界に於て嘗て覇者の位置にあつた内陸水路は鐵道の進歩に依つて、第二流の位置に蹴落されたのはつい先年の事である、歴史は「下剋上」の連續であるとすれば、これまで陸上交通にあつてお山の大將をきめこんだ鐵道が、やがては、自動車に取つてかはられるといふことは定まれる運命であるかも知れぬ。唯此の間に在つて内陸水路の重要は輓近又頻りに識者の注目する所となつて來た、是れ「歴史は繰り返へす」といふことの一例であらう。二十世紀の今日に於ても尚ほ、大學論語や兩聖書等が捨て難い所があると同じく、嘗て全盛を謳はれた内陸水路の交通も亦其の活動の分野を的確に守らしむるに於ては其の效用は決して曩日に於ける場合と優劣のあるものではなからう。是れと同じ理由に依つて、鐵道も亦自動車との間に其の分野を固く守るに於ては、其の生命を永からしむるを得べく、他面之れに因つて自動車も亦健全にして順調なる發達を遂げ得べしと信ずるのである。

一七六〇年より一八三〇年迄が産業革命の英國に起つた期間とせられて居るが、此の時代は恰かも同國に於て内陸交通上運河が全盛を極はめた頃で「カナル・エラ」と稱せられる位である。其の當時ダーハム縣の南部の如きは運河通過線より十五哩以上を隔つるの地點一つもなしと稱せられた。蓋し運河は石炭等の燃料及原料を生産地に運搬し且つ製品を生産地より消費地に運搬するに絶好の交通機關として利用せられたから。其の産業革命の促進に寄與貢獻せる所偉大なりしは容易に觀取することが能きるのである。

交通機關の發達及之れに基く産業の勃興に依つて、石炭採掘量の激增せしは明瞭であつて今運河勃興前と其の後とに分ち大英國の石炭産出額を比較して見よう。

運河勃興前	一七〇〇年	石炭産出額	二、一四八、〇〇〇噸
	一七五〇年	同	四、七七三、八二八
運河時代	一七七〇年	同	六、二〇五、四〇〇
	一七九〇年	同	七、六一八、七二八
	一七九五年	同	一〇、〇八〇、三〇〇

以上の如き石炭使用量の增加は從つて鐵の生産の增加を招來したのは當然であつて之れを運河時代の前後に分つて比較して示さう。

運河勃興前	一七四〇年	鐵生産額	一七、三五〇噸
運河時代	一七八八年	同	六八、三〇〇
	一七九六年	同	一二五、〇七九
	一八〇六年	同	二五八、二〇六
	一八三〇年	同	六七八、四一七
	一八三九年	同	一、二四八、七八一

一八三〇年リヴアープール・マンチエスター間に鐵道の開通せる以來英國各方面に鐵道が敷設せ

らるゝに及んで端なくも鐵道運河抗爭時代を現出することゝなつたが、鐵道は精製品及旅客の輸送に精進し、運河は石炭鐵礦等の重量品及硝子、陶磁器等破損し易き製品の輸送を以て其の生命として分野を守れるの一方爾來各鐵道會社は附近の運河を買收して之れを兼營し、以て今日に至つたのである。而して輓近英國に於てはチエムバレーン委員會其の他の調査員を置き大陸に於ける運河交通の狀況をも精細に調査して、英國内の運河の擴築を計らむとする等目覺しき活動を見るに至つた畢竟するに、各種交通機關は互に抗爭す可きものにあらずして協調を保つて相互の圓滿なる發達を期すべきものなるを明かに示して居るのである。

「歷史は繰り返へす」鐵道の自動車兼營は十九世紀に於て英國の鐵道會社が運河を兼營せると同じく近來に至つて盛んに行はれ來つた、一起業主が兩者を兼營すれば二重投資や交通界の混亂を防止し得るが故に兩者の併行的發達を企圖する上に於て上策たるは何等疑を容れざる所である。併しながら、鐵道と自動車との抗爭を緩和するには單に此の一方法にのみ依賴して安心をして居る譯には行かない。世は擧つてスピード時代と化し一分一秒をも空費するのは近代文明人の堪え得ざる所であつて「戸口より戸口へ、倉庫より倉庫へ」の輸送を一直線に司る自動車、發著回數の頻繁なる自動車が益々愛用されて行くのは到底制止し得ざる一般の趨勢であるからである。

マグドナルド内閣も失業對策を練るには維れ日も足らざる有樣であるが、最近英國識者間には「此の際大に英國内の各運河の擴築工事を起し、大陸諸國の標準に近づかしむるため三百噸の川船を通

はしむる迄になずべし、而して此の事業に依つて失業者に業務を與ふべし」との議論が擡頭しつゝあるのは注目すべき現象であらう。今や吾が國に於ても朝野を擧げて失業救濟に直面せる折柄、所謂「小運送」に該當する各地の道路の改修事業を起すを得ば、聊か以て失業者を救ふ所以ではなからうか。蓋し鐵道運賃の引下を以て自動車に對抗せんとしても運賃の引下には自ら限度があつて、さう容易には行はれるものではない。且つ皆が段々鐵道を嫌ふのは要するに驛に至る迄と驛からの小運送賃が高いからである、道路の改良に依つて小運送賃の低減を計ることに成功したならば依つて以て窮地に陷れる鐵道をして其の命脈を保たしむるを得べく、自動車事業も亦道路の改良に依る恩惠に浴して穩健なる進歩を見るに至るべきは必然であらう。英國に於ける運河(舟揖の便ある河川をも含む)の總延長は實に三、八六五哩の長さに達して居る、而かも鐵道の發達に依つて廢滅に歸せしものは殆ど九牛の一毛に過ぎないのであつて、今や方さに運河奬勵論が盛んに唱導せらるゝに想到せば、本邦既設の小鐵道の窮境に對して何等策を施さゞるの可なるを知ることは能きない。當面の問題として此等鐵道に連絡する道路を完全ならしむる事に依つて此れを蘇生せしむるを得ば交通界の慶事此れに若くは無いであらう、而して此に依つて鐵道・自動車兩交通機關の協力の實を擧げ一方失業を緩和するを得ば蓋し當面の策として尤も緊要適切なるものたるを失はないと信ずるのである。

——六月十四日——